生花早満奈飛
九篇　全

生花早學九編序

吉野山去年の栞は彦くて此一云ハ炎絵
上人乃名残花は枝白多りしも乃に萬世
生花手学はせを呼ことしう世に行るゝが
傳へ年々新を編を重ねる人へ度
いまだ手を多く経畫さず流を寄るもかの
山よ分入らんがおしさ此修行の道に
あそぶ学ばんと心を深くすゞめんね

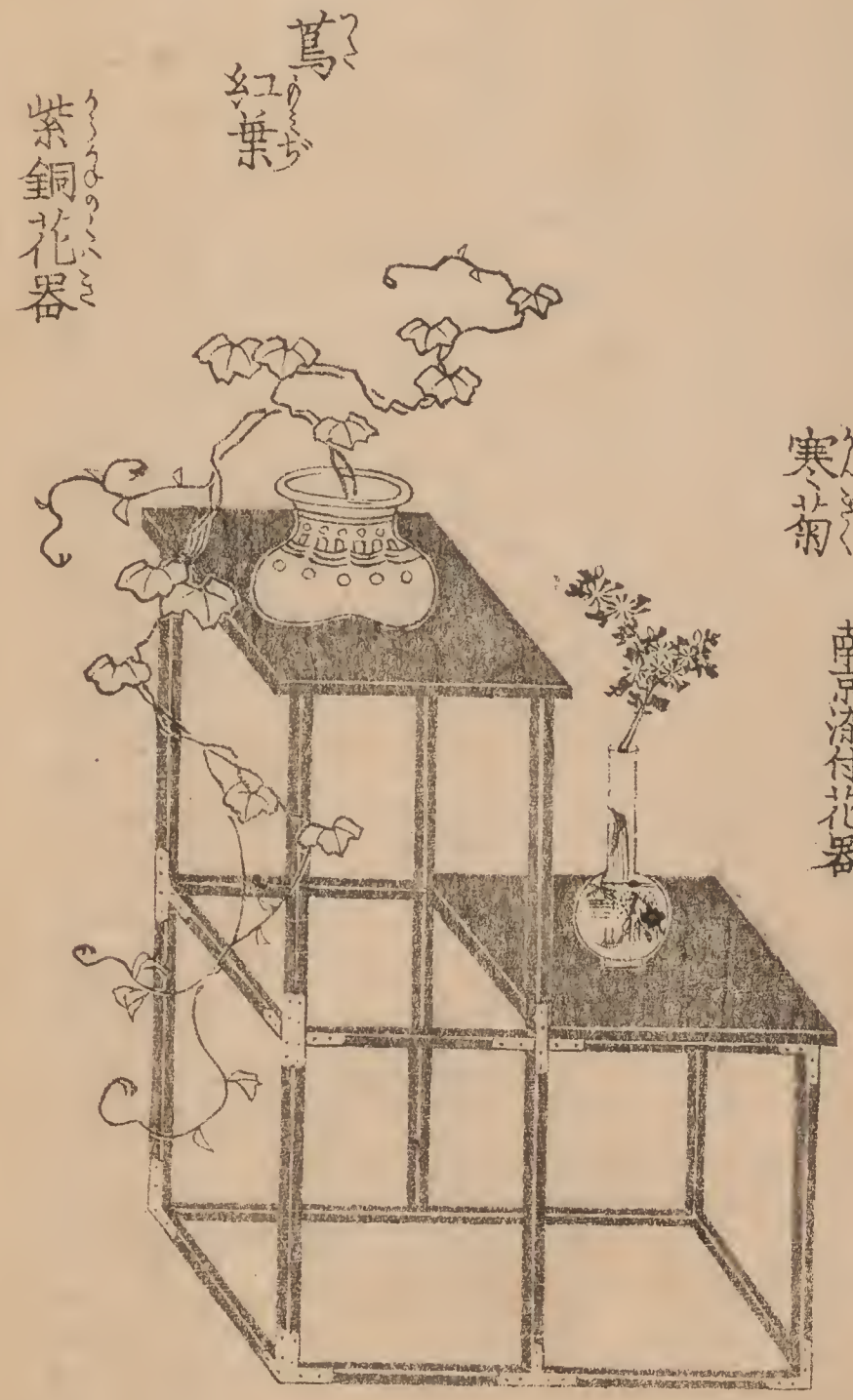
心を得ざんあひとあらば綱をいれあらね
惑ひのさんことを踵をめぐらす事
なからんことをいふ

嘉永二とせ
酉の秋満月

萩之舎主人

生花早満奈飛九編目録

櫻二種挿之図
塩竈櫻
山桜
千宗旦好井筒花器
和州在原寺の朽板を以て製スト云
一本芒
唐桐

汐汲車之図
冬の柳
長一尺八寸 巾一尺一寸
潮風菊
二段棚之図
高サ三尺一寸 横二尺四寸
棚一尺二寸四方 杉木地 銅金具
寒菊
南京染付花器
蔦紅葉
紫銅花器

○桜挿方之傳

○桜ハ平生ハ切溜の花に定りてかれを生るを秘傳とし一書に云むかし
或大臣の公乃御書院にて仁和寺雲林院ホの名木を取よせ挿させ
かゝる事ありし桜ハ散ぬ花を態と二三りん水に浮せ無事ありし桜ホ限
余花を取交るを禁ず同ド桜ハ二色三色までハくるしからず然れども好
みて挿べき花にハあらずと世々の故人言傳ふとく

○一書に桜傳云さくらハ日本の花王と称し故に吾朝におゐて花と云ハ
桜に限るとて又種類多しといへども桜とばかり号するハ一重山桜に
限るこれに依て殊更山ざくらを尊び翫ぶなり挿法ハ優美にして
風曲ある枝のうつり葉など奥ふかく挿なし濃艶繚乱として席中に
充満せる風情を賞し掛花無花ゝもに肉厚く生べし勿論余花を
交ゆる事努々いるべからず三芳野の峯初瀬の谷間とのぞむ光
景又ハ大樹の蔭に宿りせし意に挿べしとぞ

○井筒に芒を挿る説

○一説に千宗旦和州在京寺の井筒の朽木を得て井筒の花器と
作り一時唐桐と芒を挿られしが是ハ少し心合ひ過たりと自
言ましとぞ兎角花ハ何にても心の任せて態と拵へぬをよし
とせられしとも、いへり
一書に云芒ハ多く挿る時ハ葉を見切ることを斜に生て葉七九く
ある様に挿べし扇の形に成を嫌ふ一説に芒一種生るハ八月十五日に限ると云

○二段の棚ハ東山殿の御好ミにて下まて蔓物を挿らる為ニ作らせ
のミ花器雙のうち一器ハ金のもの一器ハ土器を用ひ上の段に
陶器の壷下の段ハ竹筒のずんど切なと取合に下の段ハ花ハ
その折に草木の花を低ふ幽ふ生すべし上の段ハ蔓物を臺のうへ
よりたれさがらけ床畳より八寸間のひらきまでハ蔓ともちひて苦しからず
臺の寸法ハ図の傍に委しく記せり

○水鉢ニ蔓物を挿る事ハむつかしき事なり何も水鉢ハ夏乃ものなるの
挿方なるが摂津國の金龍寺の老僧の好ミにて水鉢の上ニ四本柱の
まくを作り是ニ蔓をつたはせ生しとぞ則容殿にいれとすへ水鉢
の中ニ陶器の花器を入前ニ青石二ツおくべ美容物ニ忍冬杜花菖を
取合せ凡そ図のごとく四本のかど○につたはせ生けたりしが薫りことに水の
涼しさ格別の奇作なりしと時の人大ひに持はやせしとぞ此老僧ころ
ざし深く風流なり當山名木の桜の盛の時なとハ床ニ掛筺又ハつり
舩などを飾りおきて花を更ニ生ケ置しを折にし松花堂系譜
せられ此形勢を見て志ふかく感心せられしとぞ

網籃

定家かづら

逆傘

此花器ハむかしより和州法隆寺に有て唐物なり去るに何の用にも立ずして年久しく蔵せしを石州侯の物好にてうけ花器となし折ふし冬の頃なりしかバ山茶花枯葉に薄唐蔦ホからまりし葉末のいつかうすく色づきたる蔓をあしらひうけの其風情いとよかりしかりしとぞ是より始て世こぞつて此花器をうつせしとぞ

金龍寺形水鉢挿方之図

忍冬花かづら

美容柳

○網籃ハ前ニ図するごとく底ハ杉板ニて口ハ竹の輪ニ縷糸を以
て下より次第ニ末ひろがりに網とすれバ中ニ紫銅の小さき
花器を入すへ是ニ定家かづらを挿て蔓を内よりそとへせて縁へ
出し夫より下へさがられ蔓の勢をのこさせ挿るゝ網より見へすれ
ざる光景面白き事又類ひなし此花器ハ
或数奇者の傳へられしとて京師
島原の遊女吉野是を
用ひしとぞ実女ニハ
似つかはしく艶しれ
好ありし一書ニハこゝろうり

三筒

一書ニ桃三種を挿る図を出せるゆゑかくに出せり
右何ニても苦しからバ時の宜きニ隨ふべし

撥桐手挿方

此花器ハ南京の陶器ニて
凡長サ二尺五寸余ありて
銘を撥桐手と号れしとぞ

一書ニ昔八幡山の滝本松花堂の茶の口切ニ折ヒ
早咲の山茶花ニ水仙を合せて生られしとぞ

草屋形夕顔挿方

萱葺の四阿屋と
作りて組臺ニ
乗るあり
挿方ハ図のごとく
屋上を這せ
蔓先を垂て
自ら勢ひと
りてよし
一書ニ見へたり

花筒ハ青竹ニて横ニとくべし
夕貌ハ申ノ尅より戌ハ尅までの容ニ出れ

○紅葉牡丹挿方 並 諸花之傳

さくらハ花上より
開くものなれバ上ニ花を用ひ
下ニ蕾をもちゆべし右都合三才の三本

一 真

三 草

此所より鋏子を入て真の枝と
草のえだニ用ゆ

二 行

三 草

切る所此のごとし

△此所よりえださきと
いれ切すつべし

地の枝通例より高く入べし

桜の種類多しと
いへども山ざくらを
生べし其余ハ
好ましからず

一 天

二 人

三 地

○桜ハ花を沢山につかひ
賑やかにさすべし
花すくなく寂しく
閑静にいれバ
さくらの本意を
うしなふ

一説ニ
○茶席にてハ桜を入べ
是ハいかにも花のうはし
きをかくる故なりとぞ

○鶏冠木ハ紅葉の中の第一とする也是を紅葉と称ハ三躰三枝乃生方にすじ色ハ下より染るを本とすれバ下枝照ざるハ用ゆべからず是も地の枝通例より高く挿べし初紅葉の時ハ下赤く中半照上青き方よし中旬よりてハ下中赤く上青し盛にハ三段ともに赤きを用ゆ時候の差別心得べし 一説に未だ表ハおもしろひを添るもよし若しからバ下去

○牡丹ハ初の頃ハ蕾を下にきるべし盛にハ上下に構ひよし右に三才の三本く地の枝通例より高く生べし 一説に葉にて花をつゝむやうにしてよし

右桜紅葉牡丹の三種ハ一本を生バ二本以上二三本に限るべし桜ハ花の王といひ鶏冠木ハ紅葉の中の主たり牡丹も又花の王と称バ或ハ富貴艸豊備しもとなれバ別て此三種にハ会釈を嫌ふ事も禁ずバ又右三種二重切に生る時ハ必バ幹けると一本入て上下の内にて三才を分てとゝのへ残を二本と入て都合三本の入方なり

又二本の時ハ二重以上に遣ふべバ三本二重にも又つかバ是三本の外ハ共木にても三

一説に利休居士ハ牡丹の葉をとりて花ぞろりと入しぞ是もさくさくてひとしくおのうるはしきとる好くとぞ

才の枝の余ハ遣ハス殊ニ余花ハ一種も用ゆべからズ又苔晒木とつくよ
ふ人の枝地の枝ホニ用ゆし右もさらニ晒木なし紅葉ホ苔を
用ゆべからズ牡丹ニも苔を用ひズたゞ是を二木一草と云
○蓮ハ一花一葉二花三葉余花を用ひズ水慈姑ハ二花三葉三
花四葉余花を用ひズ花ハ葉の上下ニ浅くふかく時ニ任ス河骨
花葉員蓮ニおなじ余花を用ひズ是を三草といふ
○一花一葉生の事 牡丹杜若椿水仙ホ古来より有といへども態
と好みて生るニハ及バズ牡丹も自ら切時ハ外ニ花葉の無きニハ
切べからズ又他より到来の時一本切来るとも葉ハ必らズ二葉ある
べし二葉三葉あるべきものを無理に一葉になし口傳と称じ
生るニも及バズ杜若も葉一枚ありて無きの事と同じくつくべけれども
冬の初よハ花ハ少くとも葉ハ五葉も七葉もいるべし畢竟止む
得ざる時の心得とも有べし則ち一花一葉の時ハ是ニならく三躰を
備ふべし一輪生の事ハ大躰右の四種ニ過ズ右も一花一葉ハ好
ましからズ一輪ニ葉員二三葉つくべし
牡丹ハ葉二枚を人と地の形ちに用ひ花ハまさく天の形を備ふべし
杜若ハ葉三枚の内長きを裏ニして前ニ長短二枚をそふべし
椿ハ牡丹ニおなじ心にて二葉用ゆべし
水仙ハ葉二枚く花首常より短く生すべし葉杜若におなじ
○夜會の花ハ凡て白きを専とス雪日ニハ白きを忌べしといふ

○鉄子入方に差別あり○蒲 椿 萩 檜扇 芒 一八 馬蘭
右ハいづれも斜に切べし○芦 椶櫚 萱草なとハ矢筈の形に切るべし
○馬蘭 著莪になハ食割葉を用ゆ
○鉄子に入ざる物ハ石菜 玉簪花 燕子花 菖蒲 蘭 紫蘭 水仙など
○松ハ大生につかふ事専らなり二重いけるにハ掛花に入れてハ風情の
よろしきハ少きものなり大木ハ一本余ハ凡二本又ハ三枝或ハ切株付のこと
時に随ひて面白く思ふべし作るべし是非に大生にハ株を入るべきと
定まることハなけれバ尚小形のよろし二尺ばかりも余まる枝を生るに枯枝
ともに二本入るべし古来より有しくだら好をてすべしあるべし
自然用ひらるなりしかれ有バ時の宜きに随ふべし

切株つきの松

會釈ハ時節に
應じて用べし
ならしらひの草花にて
地の一体をとるのなり

枝の作りハ立花とハ異にして怪く作り
少もに生べし

うけ花にハ
作方心に任すべし
丸ものそろひとを入るを禁ず

○竹ハ一本より三本或ハ三本五本七本まで生じ両葉の枝を多く差べからず是ハ貫抜又ハ両手の形ちある故也但し一枝の内ニ陰陽ありて束二ツ着たるものあれバ一方ハ陰の葉一方ハ陽の葉となるゆへ用ゆる時ハ両葉にても風情あれバ苦しからず又三本五本の内両葉を用ゆるとも葉ハ半の数にすべし尚三本以上ハ黒枯或ハ晒竹などをさすべし竹ニ草の形ちあり真と行の二体に直にたつるハ真之横につくハ行なり尤も葉枝を掛て用ゆる時ハ草なり竹の二才ハまづ一本生の時ハ必らず二才にて會釈の花をとりつく地とし又枯をうしろへして二本の時ハ枯を地とするなり人の体に用ゆる八寸法にすべし扨又三本の時ハ天ハ左へ傾たるバ人ハ右へ前とり有べし

竹三本曲入

是を枯留と云
伐方養方ホハ
第二編ニくはしく
出せバこゝに略す

○小竹の事常ニ小筒ニ入るるも篭及び竹筒を忌べし小竹も生るふ真の花形大略如し但し紫竹ハ生る事を忌よふ

○八手木二本三本ほし一本株つるひらるもほし一説ニ四月八日の後毒ありとて用ひざるよふ

○檜梅柏凡そ大生ほして二本を度と次三本ハ過るとそり

○南天燭ハ二本以上七本九本心ニ任るべし一本ハ好ましからざる

○枇杷ハ實の時を用ひべし二三本よし大生ニハ苔を用ひてよし

○梛ハ枇杷ニ准じ大生の時ハ苔晒ともに用ゆ

○檜柏大生専らニ一本ハ生べし三本ハ過るゆへ二本ニ花の會釈よし

○若松一本ハ生べし置筒掛ともに風情如し作意の船小至極のとのく

枯柏　朽木　小菊

遠州流ニてハ苔つきの枝あるいハ晒木を用ひべしと云

柏ハ青葉の時ハ風情なくして面白からず
右一本ハ入べし二本ハ過るとそり

枯時ニいるるべくいろく景色ありべし

○花実陰陽和合之説

○挿花ハ和合を第一とする事也草木非情無心といへども陰陽和合を備へたれバ有情活物の用をもなす故に生花の道ハ大小内外表裏悉く和合をなすを本とす莟める花を陰とし開きたるを陽とし半開ハ莟てひらかず開くにあらずして即ち和合の形なり又つぼミ一輪を入るときハ陰中の陽とす開たる一輪を陽中の陰とす又花葉枝に和合を調ふるハ右にさして出たるを陰とし左にさして出たるを陽とす下なるを陰とし上るを陽とす左右上下縁をとりて和合をなし扨又右に進なる性なれバ左にめぐる気をそなへ左に進む性なれバ右にめぐる体氣を備ふ是又和合なり葉も又同じ左右に分れバ同様に出たる葉右をさすハ陰左をさすハ陽にて同様にてハ和合ならねバ左右と分れバ葉に自から陰陽の位具るゆへに縁をとりて和合をなす又葉と葉と付重なるを合さる所ハ縁なき故に和合せず程よく離れる所に縁をとりて和合をなす又上下対ひ合さる所の陰陽其中小縁をとりて和合となすされバ此縁を取とらぬ所是生花和合の肝要之止事を得ざる縁なき所において縁を求めて和合を挿る事なり是等の所ハ皆虚実の扱ひより出ることを知るべし是天地の万物を生育する所水火寒暖の外なし暖氣満る時ハ寒気これを沉め寒気満る時ハ暖氣これを暖め此和合を以て万物を保生す此惣名を陰陽と名く故に万物これによらずと言ふことなし

玉簪挿方
一 二 三 四 五 六 七
第一ニ此葉を入
次ニ二の花をつく
次ニ三の葉を入る
花ハ一三の葉ニそへているべく
次ニ四の葉をさし
次ニ五の花ハまへんるより
次ニ六の葉を入る
まへの花ハ五と六とそへ
次ニ七の留葉を入る
葉ハ三枚の時ハ
一二の葉を除くむ二のおもなし

○葱花ハ花一本ニ葉二枚花二本ニ葉五枚挿べし花の旬ニハ花高く入べし未ダ盛ならざるニハ花を低く入べし四月の初の頃ハ花と葉より低く挿べし時によくらぶひて用捨すべし

又流義ニよりてハ花一本ニ葉二枚花二本ニ葉二枚二本と四枚なるもあり其流ニ随ふべし

○七種の釣瓶之傳 或書出

○苔清水の釣瓶

苔のむしたる山岩清水の底さぐりて下すハ夜も昼も絶ざるなど

右ハ落塩の定座ニ一瓶と釣瓶の定座（釣舟ニ同じ）一瓶ハ床の正中ニ並あり
なれも下ニハ義しれ小石或ハ黒白の碁石など敷て嶋形にしきて
其上にすゆべし但し並の方を賞花とすべし上の瓶ハ無物
とし下の瓶ハ角と正面とす

○朝露の釣瓶

とくに落しも深くも並ニ添花と寄との中でゆいれ
是ハ二重の置釣瓶なり縄を用ひて重ねて並之挿方二重
切ニ同じ上の瓶ハ和らに下の瓶ハ競ひて生べし下ニハ編竹乃
筏形をしく又小石を敷もよしとりハ重添方ハ図乃ごとく
手遠ひニ添べし下ハ鐶付の木をはずすべし
此のごとし

えうしご

萱草

下の瓶の余りを直すぐにて竪づく
これハ少し風情をつけて捨て添てもよし

○軒端の釣瓶

結びおく露けき光りの影いれて軒はのふまやどる月影

是ハ一ツ釣瓶にして細き竹三尺五寸に切て鐶をかくる上ハ枝を少し残し上ハ紫草のるいハ藤にて輪をつくりからみ蔓をのを生ると知べし此竹に纏ふ事もいづれなも女竹の類ひよしふしハ半に切べし

○板井の釣瓶

是ぞこの板井の清水に結びし影ハ扇もさしぞそ流る

是ハ床中の花器釘に一瓶とうけ一瓶ハ床の陰座へ寄せて置く此時ハ上の瓶を賞し置る瓶ハ前のごとく小石なるひハ竹簾を敷て置く又ハ縄にとりつけて其上におくもよし

○宇治橋の釣瓶

風吹バ川辺をとじくよる浪ハ辺にかゝるべき瑯ことせよ

○是ハ一瓶の置きり花高く挿べし

縄と鐶の結び目を除て少し縄をのこし切べし但し角を正面とすれ
此作意ハむかし宇治の通圓宇治橋にて水を汲て居ける折ふし
利休来りて訪られしかバ通圓直地に其けるべの縄を切らく
水指に用ひしかバ利休大ひに風流と賞せしとぞ是によりて其
趣をとりしと宇治橋の釣瓶と号せり下に大青石兵庫砂などを敷てよし

○垂髪子の釣瓶

筒井筒いづつにかけしまろがたけ生ひにけらしな妹見ざるまに

是ハ重置の釣瓶にして大暑の砌炎気を凌ぐため上下の瓶に
水十分に張て美しき小草の花を二種取合せ上の瓶にすじく
挿け下の瓶ハ水ばかりにしてく上の花の水にうつると趣向しハ、
むも床の地板にも露を持ぬじとなり

○競馬の釣瓶

こが駒とくよはひくる菖蒲ぐさ生ひおくるしや負流あるべし

是ハ対の釣瓶を両方ともに鈎ありて雙ありてかけると云心より競
馬と号る下の瓶ハ花の丈を短くいけ上の瓶ハ丈を高く生る趣向
なりされバ常法の規矩とハ相遠ふといも澄哥によれバ紫羅欄と両
種生ても或ハ一種にても挿るを例とし端午に挿るを所詮とせり
常にも是を用ゆれども挿方に差別あり常ハ凡そ上に蔓物下
ハ少し立のびたる物を挿るを通用とし但し陽の瓶を高く
陰の瓶を下に釣べし高さハ落掛の下端と床縁の上端との間

三ッよりにて其一分と二分とに瓶の口のいくらせうに釣るを定例とはきまりたれども花の恰好によりて少しの高低あるべし

○凡て釣瓶ハ夏日炎暑の節を専らとす故に清涼なるを肯とす手縄なども能水にひたし露をうたし待せて用ゆべし尤草の器なり釣どころハ船の座に同じ掛方ハ瓶の角をよけて掛べし

かくの如くにすべし尚正中にも生ざるなり

元来此器ハ廣口の物にして花留めがたし是によりて十文字など入て留るべし然れども二三本入ざれバ止りがたしされバ隅に入ざるものへ然しながら斯花留多くてハ悪き事へ蓋などを入て其花瓶ともなるもなし或ハ花大にして留りがたき物ハ古銅を入て止べし尚釣るべきハ花重ければ傾き安しまた時に古銅に青銅又ハ石を入べし但し此瓶ハ手ひろきものにて小草物の類ハ斜に入まして手にて留ることもあり

大なるハ斯のごとし

されども手を竪にせざれバ便

木物の類ハ物によれバ略り乃

枝なりてよし　但し石州流にては釣瓶の角より生するなり

○但し此瓶は雑物の形ちあるゆへに薄板などの上に置べし故に岩石なるひは碁石兵庫砂などを蒔て其上に置べし

○手縄の差別は塗釣瓶を書院に用ゆる時は銀鎖なるひは真紅の組紐を附べし木地の釣瓶には藪の綱葉を假用ゆべし又曝板の釣瓶蔽縄藤縄棕櫚縄鐵鎖などを用ゆるなり

○釣瓶寸法の事は既に三篇に両様出せり然れども諸流各大同小異なりて一様ならず或書に云寸法を左に出す　石州流

上六寸四方　底四寸四方　長　五寸五分　板ノ厚サ四歩　手ハ七歩四方

ふちより四分さげて附るなり外へハ出さず縄の長さ七寸八

○井筒の寸法一尺八寸四方高さ五寸五分井桁組出し下ハ端を出さず又一尺七寸四方より一尺五寸四方までに作るなり其ハ席の大小に准ずるなり井筒のほかの木ハ一寸四方或ハ一寸二歩半の木を用ゆるなり青磁茶色などの陶器の釣瓶なりとも木作にかへることなし敷板ハ圓板半月或ハ草などを敷べし余ハ用ゆべからず花ハ釣瓶の隅より生出すべく上下のはなくの花互に障る事を専らに忌べし

且釣縄に花の障ることを忌む

但一ヶ所ハ許すなり

二ツ釣の時ハ常の二重の挿方にてよし又井戸側にある時ハ三重乃
挿方にすべし二重三重ともに一ヶ所も休むことをせず遠に用る時ハ
縄のかざりあるべし　以上石州流の所傳く

○一書云　遠州流　釣瓶の始ハ利休庭の井の釣瓶に朝顔のまとひ
しを見て作り始しものなり然も四季ともに通用し
尤釣瓶ハ秋冬ハ床畳より二尺上る春夏ハ二尺三寸上るくまる
一の釣にかくべハ手を一文字に見るべし一の遠にかくべハ手を筋ちがへて
見るべし對の釣瓶ハ上を一文字下を筋遠にすべし然も右の方を
釣上左の方を下におく此左右ハ對ひての事く數具にハ車をまつく
と此ハ軒の右の方にかくべをかけしよせて遠べし極暑の釣にハ
下の釣瓶ありハ花を挿上へハ水を入るべし秋冬ハ上下へ
挿るし極暑の時ハ上の方へ例より少し高く釣べし凡つるべの底を
花生釘の上端に見るやうにすべし

長春

下竹に花器をうけて
挿る図寸法次に記し

或云下の釣瓶ハ床畳より底までの高さ
六寸ほどにかくべハ捧を以て製れば尺寸八分
釣手六寸八分にて縄ハ紅ひの丸打なく

○利休居士の作りそうじめし下竹とゆゑハ少し太き竹を二ツにきりて長さ五尺八寸ばかりに切て上に折釘穴をあけ下ハ見合せて折釘をうつ是ハ床の内にもさげ又ハかれなりとも勝手に任せてかけ置花器をかけて花を挿しとぞ左景ある竹を用ゆ一説に凡長四尺六七寸ありと云

又互宝軒の好みとて大ひろき景ある錆竹を二ツにきり垂撥の如く中ニ筋穴をあけ折釘を上下自由にして上の折釘の所ハ二重乃折くぎをうけ又総糸にても下る事とぞ

○一説に垂撥ハ東山殿の御物数寄より出しとぞ其寸法一様ならず大同小異ある事ハ流義々々によりて師家の好みを加ゆるが故なるべし既に第三編に図を出すといへども聊か異なる所あるを以て再出之

無撥とハ琵琶の撥を似せたる物也撥のごとく上のせまき方を厚くし
廣き方を薄くすることぞ又上より一尺五寸五分下に哥あり
常盤山こととふいそす岩清水ミなもと末もかさしく
右の哥を二行に書しまたハ四字宛の四字を讀入し哥なり異本にハ
常盤山ときはに見えし岩清水しまの日数を又も来てとへト有
東山殿の御作とも持明院殿とも或ハ園中納言基衡卿御作
筆なりといひて其説區にして詳ならず
右ハ四畳半囲座敷にハ躰のよく廣間にハ裾をかくし長やうにつて
よろしく花も高く見ゆるなり
〇有楽斎好無撥の寸法

折釘穴の上の所六分　惣長弐尺八寸二分

穴竪一寸二分巾四分
此穴より下の穴まで
一尺七寸七分
此穴より下
七寸四分

わくごとに二所にふせ入れして用ゆべし
又こちらに蝶つがひ付て二ツにたゝむやうにもなる無理もしす法ハ同じ
屏風のやうにひろげしまゝにて
二ッ折の釘を以て自由に用ゆる也
長さ二尺八寸二分にて作らバ
廣間にも数寄屋にもよく
無撥ハ惣じて張付の床などでハ掛ざる事に成来りされども壁に
中釘を打ずして無撥を用ゆる方よろしきなり

○匏瓜花器挿方

一説に此器ハ秋の末より春二三月の頃までの物にして寒気の節洞中に冬籠の体に象る物なり故に夏分に用るものにあらず凡て此器丸く洞ふうなる物ハ洞ごもりの体寒中などハ水仙万年青の如きもの冬ごもりの体に生てよし大器別してよし

此器一様ならず種々の恰好ありて或ハ凹く又ハ長く細きもの太きもの短きもの直なるもの邪めるものあり是ハそれぐに應ずる花を見立て入べし

長手なる類ハ格別太ければ洞籠の体なるべけれども通例なるものにハ懐せずして洞籠より出来かゝし然る時ハ春暖にもおもむく洞中より顕るゝ体に挿べし則ち内に取るなれ牡丹などの和らかなる大輪ものを中として葉の青々としたる景色よきものゝ至るく

細きものにハ東菊福寿草の類みどりなれ小草の類宜し是よりハ夏よりてもの小草ものを生て用ゆるもよし全体此ものゝ万年青を挿して始めとするよし寒氣を凌ぐ洞籠の体なり故[illegible]

生る方外へ長く突出さん生るくさるに依て細長きこそよけれハ
生ん挿るとも花居らぬ扨又根下の花ハ必らず洞のうちに
かくしむべし然れども座して見ゆる位に生べし尚小口よりかゝる
体ハ鉢次口の四方にそふるハ悪し額を立て見切ハ十文字見
切とあつて甚だかしく尤この匏瓜の花器ハ回りのあれバ
床の正面に掛るとし柱などにかゝるものにかくべく床なき柱
などにハ正面なくとも掛べくん突出しるゞしくして悪し
大きなる丸みのある故に細長き類ハ床なれ柱にかけてもよし
此器ハ置生にして宜しからざるものなり釣生にするとれハ中の込
筒かくりして甚だむさくし見ぐるしきものなり内にきくまでいある
鉢などに入て掛るがよく有んとなく
然れども当代ハ凡て内を黒塗などにして最もきれいなれバ
其心配に及ばず只花を深れかくちにかけるを専らとして組し此
器ハ蔓ものの故に蔓物を生ることを忌べしといへども故人なれバ
夕顔を生る大方ゆゑを取し事かりとりされバ何れとも
取べきや只時のよろしきに随ひ尚流義に任せべし

○匏瓜花器七種の図

まるに二重

鶴首 とも云

かんろう

洞

ねずの尾

香ごん切

何にても中筒を入るべし立時ハ落扱を用ひべし
又蔓ものを生べし
右ハ遠州流の傳也

手桶の傳

○花手桶ハ花器にハあらず他所へ花を贈るに用ゆる器なり故に内に九曜の如き穴をあけたる簀を入る也此穴に花を数色いけて贈るべき桶箱ともに其好ミに任す大小勿論の事其花入やうハ他にて何にてありとも生並る物なれバ束ねて贈れバ花も損じ安く且又景なきゆへに是に入べきなるべし故に花の茎をとらずとも切たるものを落さず只切取たるまゝ座りて送るなり然し一塊りにして入れバ花桶花筐の詮なし されバよつて其全体の長き花を主として夫より段々に短き花をとるべく模様よく入るなり上の横の手を見切事もあるべし手の前後に景よく入る事を専要とす或ハ

花手桶 寸法
箱ノ高サ 九寸二分
手ノ長サ 一尺二寸六分
手ノ幅上ニテ一寸強シ
手ノ頭両方遠ヒ斤ソギ
簀側ヨリ一寸程下ニ入 何レモ外ノリ也

竹の責を入て上下とも自由にするも花配りよくして都合よし
花などもたゞ左右へ進めバ横木などにて、ゆつまりに細工すぎたるハ
よろしからず桶箱ともに手軽き方よし

○客人へ庭前の花を進むる心得

○庭前の花を客人へ伐て進らするにハ主人より御好み乃
所を御差図ありしとあいさつあらば客辞退せバ主人庭へ
おりて見よろしき伐るべし或ハ給仕の者へ言つけ見つくろひて
伐て参れと言べし。○給仕の人ハ勝手へ行て花盆か若ハり
ひいさくバ折敷広ぶたにても花盆にして鋏鋸の類一同にのせて
出て庭へおりて花盆ハ椽頬の右の方へ下せて榊花にも成べき様格別

大ざくもちいく真ニ成べき枝を第一ニして其余ハ大小ニ本斗見つくらひて
伐るべし座敷より見通しの枝を伐べからず木の後のかたこて見斗
伐べし扨花盆へのせて根本を向ふへむけ主人の前ニさし出べし
草花ハ凡蕾と開と取まぜ三本か五本か但し燕子花菖蒲一八乃
類ハ花一本に葉四五枚づゝな燕子花ハ水切葉とも添べし
河骨ハ巻葉を重ねすべきや開き葉も重ねまぜべきや主人に
対ひ兼り差図ニ随ひ花一本に葉とりまぜ二三四枚づゝ添べし
玉簪花杜衡の類も花一本ニ葉二三四枚づゝ葉の大小を見斗ひて
添べし余ハ是ニ准じ万年青ハ分て葉の多きを宜と心得べし
尤実一本ニ葉五六枚づゝ其内へ真直ニ立てる葉横へ流るる
葉と二三枚も添べしいづれも草花ハ土際白根をつけて剪くる方よし
庭前の花ハ猥りニ剪まじき事なれども客人へ饗應の為なれバ

是非に及ばざる太
挿花に用ひらるべき
やうあらく
切べし

○剪たる花を人に進らるゝには根元を紙捻にて二所ほど下ぐゝりを
して其上を奉書かるひハ杉原又ハ半紙なとにて包み水引弐
かけ引ほどき結ぶべし

○新宅祝の花形

○一書ニ云往昔細川幽斎公新宅の寿ぎに挿ける花形あり花器ハ
千年首といへる細口形の筒にて長さ唐銅の花器なり下ハ
杉の木地にて作し亀甲板としたり花ハ雄松に寒菊を會釈
として中に白羽の矢を立て挿しとぞ尤此時ハ冬なりし故右の花形之
景色もまに此すがたを以て立花のごとく挿べきものにて肝要とす掛
物ハめでたき一幅対を掛るがよしと傳へ置れしは此花ハ家移に限りて
常にハ用ひざる花なり松ハ根のつきたる松を用ゆべしとなり
花瓶ハ鶴に表し敷板ハ亀にかたどるなるべし

箭を立る事ハ尚別に正しく記す

一書ニ云
三ヶ月形の花器ハ奥州伊達ニ正宗公の
御物好とて金の九乃さしこミ
二尺五寸ニして雲の鍾彫あり

○花塵

○一書ニ云千利休ある時堺の禅刹に
いらし時をりしも冬の頃
なりしが時の花どもいさゝかもなし
調て住持の僧挿方を
所望せられしが床の掛筒
ハ唐橋とよづら何の
子細もなく抛入なれて
次の間なる窓の下に長板を
しき其上に塵篭と並て梅椿

水仙寒菊なども取合せ花の莖にしてまぎらはしく捨られるが花よりハ格別に気のかはりて面白く衆人感心せしとぞ是等ハ名人の作意なりとて斯の如く其図をうつしとゞめおく

生花早學第十編
口授秘傳之巻

○此編ハ初篇より九編にいたる巻々に書もらせし口授秘傳の奥義を詳に著ハ所謂開傳の一書之

生花早満奈飛九編畢

攝港 鷄鳴舎暁鐘成編輯

生花早學 自初篇至五篇 成刻

同 自六篇至十篇 成刻

弘化二乙巳歳九月發行

書房 大阪心斎橋通南久宝寺町北ヘ入 伊丹屋善兵衛梓